手

ダイチ

夕陽へ向かう電車の中、女の手を見ていた。

窓際に座る、若い女の手だった。

「今さっき月を砕いてきたの」と手は語った。

それほど、白く、強く、内側から光っていた。

トクトクとつ青い血管は、私の本能を刺戟した。

手は、時を止めながら自分だけ息づいていた。

―――　良いになるかもしれない。

それとも、もうそうなのかもしれない。

夕陽に照らされ、手はいよいよ美しい。

美しくあろうとしているわけではない。

その手に邪な意思はない。

愛は美しいのか、美しいから愛なのか

そんなこと、手は気にしていない。

子供の頭に

夫の背中に

月の破片やら愛やらを埋め

与え続け、

与えられ続け、

果てはの手かもしれない。

一番幸福な手かもしれない。

―――ところで、私の手は鉄の匂いがする。

感情を殺してきた匂いがする。

　見えない血に濡れた手　―――。

目をつむり、腕組みをしたまま

私は、少し窓際に傾いた。